

## 年表 松浦武四郎 嘉永6年から万延元年までの活動

基本的な年月日は旧暦で表記する。重要な年月日は（）内に西暦をも記す。松浦の年齢は数え年で示す。「近世蝦夷人物誌」に直接かかわる記載の前に■印を付ける。また日付は、松浦のいわゆる「自伝」と、それぞれの踏査日誌（「丁巳日誌」など）と生前に刊行された地域別の旅日誌とでは場合によっては差違があるが、原則として「自伝」のそれに従う。閏月は\*印を付けて示す。

この年譜は作成中のもので、これから嘉永六年以前と万延元年以後に延ばす予定です。今ここで公開する分も必要とあらば、訂正したり、補ったりして充実したものにするつもりです。どうか、ご意見、ご批判などをお寄せ下さいますようお願いいたします。

### 参考文献

校注 簡約松浦武四郎自伝 松浦武四郎没後百年記念事業協賛会 1988

新北海道史年表 北海道出版企画センター 1989（新北海道史、第9巻／史料3、1960の部分的再版）

近代日本総合年表 岩波書店（第二版）1984

高木崇世芝編 「松浦武四郎「刊行本」書誌」 北海道出版企画センター 2001

吉田武三「松浦武四郎略年表」（「定本松浦武四郎」巻一、357-376）1972

秋葉実「松浦武四郎住居の移り変わり」（松浦武四郎選集、別巻 2008）北海道出版企画センター

<b>嘉永6年(1853.2.8 - 1854.1.28) 癸丑 松浦 36歳</b>
---

- 1.- 松浦は、この時期、大日向柳慶橋（現・新宿・新小川町二丁目）の長屋に住む。
- 2.20 (3.29) 洪秀全が率いる太平天国の軍が南京を征服し、南京を天京と改め、太平天国の首都とした（太平天国の乱）。
- 4.19 (5.26) ペリー、米国軍艦4隻を率いて琉球那覇に来航。4.30 首里城で総理官・布政官と会見。
- 6.3 (7.8) ペリー、浦賀に来航。6.6.江戸湾内 小柴沖に進む。6.9. (7.14) ペリー、久里浜に上陸、米大統領フィルモアの親書を幕府応接掛に手渡す。6.12(7.17) ペリー、翌年の初めに再来する旨通告し、日本を去る。

- 6.15 (7.20) 幕府、ペリー来航を奏上。7.12: 米国情書訳文を朝廷に提出。朝廷で激しい議論が起こる。
- 6.22 (7.27) 第十二代将軍徳川家慶 没。
- 7.1 (8.5) 老中阿部正弘、米国情書の返書について諸大名に意見を求める。
- 7.3 水戸前藩主徳川斉昭（水戸烈公）、海防の幕府参与に命じられる。
- 7.18 (8.22) プチャーチンの率いるロシア艦隊、長崎に来航。 8.19 ロシア皇帝の親書を手渡す。
- 7.- 松浦、「読史贅議」斎藤竹堂著、安積良斎序、塩谷世弘(宕陰)跋、羽倉用九(簡堂)後書、復刻版を出版。
- 8.6 松浦、最初の三回(1845、1846 1847)にわたる蝦夷の踏査日誌である『三航蝦夷日誌』（35巻）を水戸藩士加藤木賞三を介して徳川斉昭に献上。
- 8.- 吉田松陰、萩藩主に意見書「将及私言」を提出。
- 9.1 ロシア海軍の陸戦隊、樺太のクシュンコタン（後の大泊、現・コルサコフ）に上陸し、陣営を築く。
- 9.2 (10.4) トルコ（オスマン帝国）、ロシアに宣戦布告。（クリミア戦争開始）
- 9.16 松浦は藤田東湖、吉田松陰、鷲津綺堂らの秘密文書を持ち、中山道経由で京都へ出発。朝廷に対して、幕府が「国体をはずかしめざる様」との御沙汰書を出すように働きかける目的。
- 9.23-25 (10.25-27) 松浦、伊那谷の浪合村を訪れる。後醍醐天皇の孫で1424年に没した尹良親王ゆかりの場所を訪問。
- 10.1 (11.1) 松浦、故郷の津を訪問。10.3 伊勢を訪問。10.11 京都着。そのあと幾人かの活動家と会う。
- 10.18 (11.18) プチャーチン、長崎で交渉開始を催促し、サハリン、千島諸島の所属問題の解明を要求する文書を提示する。10.23 プチャーチン、一時的にシャンハイに去る。
- 10.23 (11.23) 徳川家定(1824生)、第十三代将軍に任ぜられる。
- 10.28 (11.28) 松浦、京都を出発、江戸に向かう。
- 11.19 (11.19) 松浦、江戸に帰着。「癸丑浪合日記」
- 12.5 (1854.1.3) プチャーチン、再度長崎に来航。12.20 交渉開始。

## この年

ロシアの作家ゴンチャーフ、プチャーチンの書記として来日。1858年旅行記発表。

ドイツの画家ヴィルヘルム・ハイネがペリーの雇画家として来日。1856年に旅行記発表。

嘉永 7 / 安政 1 ( 1854.1.29 - 1855.2.16) 甲寅 この年は閏 7 月があった。  
嘉永 7 年 11.27 (1855.1.15) に安政に改元。 松浦 37 歳

- 1.1 (1854.1.29) 吉田松陰、松浦を訪問。深夜まで情報交換。
- 1.2 (1854.1.30) プチャーチン、長崎にて和親条約案を示し、日本領の北限は択捉島と南樺太のアニワ湾とする。これに対して日本側は択捉島は日本国土であり、樺太についてはこれから交渉すべきであると主張。1.8 長崎を去る。
- 1.16 (1854.2.13) ペリーの率いる米艦 7 隻江戸湾に入港（二度目の来航）。のち、さらに二隻増加。
- 2.8 堀利熙（目付）と村垣範正（勘定吟味役）、蝦夷行きを命ぜられる。
- 2.30 (3.28) 英と仏、ロシアに宣戦布告（クリミア戦争開始）。
- 3.3 (3.31) 日米和親条約（神川条約）調印。下田と箱館二港の開港を決定。
- 3.7 松浦、樺太（サハリン）の国境策定に関する提案をまとめ、幕府の役人松本十郎兵衛（穀実）に提出。この時期、水戸の徳川斉昭公が松浦を数度役所に推薦するも、その都度、松前藩の妨害に会う。
- 3.23 プチャーチン、長崎に再来。3.29 去る。
- 3.27 (4.24) 吉田松陰、アメリカ船にて密航を企てるが、断られ、日本の役所に自首する。4.6 松陰と彼の師・佐久間象山、藩地蟄居を命ぜられる。
- 3.27 村垣範正ら、松前・蝦夷地調査のため江戸を出発。5.4 松前到着。
- 4.6 (5.2) 京都御所炎上。
- 4.15 (5.11) ロシア軍艦、北蝦夷地（樺太）のクシュンコタンに来航。五月はじめまでに更に三隻来港。4.18 ロシア兵、クシュンコタンを撤退。
- 4.15 三隻の米軍艦、箱館に入港。4.21 (5.17) ペリーも軍艦二隻で箱館に入港し、松前藩の全権と交渉。5.7-8 箱館を出港。
- 5.12-26 (6.7-21) 松浦、下田の米国船に関する情報収集。「巡豆日誌」を著す。

6.12 (7.6) 堀利熙と村垣範正、宗谷からクシュンコタン（久春古丹）に渡る。ロシアの陣営を訪ね、さらにサハリンの北方及び東海岸を廻る（50 緯度まで）。

6.18 (7.12) 上海で英・米・仏の 3 外国役人による税関管理発足。

6.30 (7.24) 幕府、箱館奉行所再設（以前は享和 2 年（1802）から文政 4 年（1821）まで存在）。竹内保徳が初代箱館奉行に任ぜられる（最初は江戸、9 月に箱館に着任）。

7.- 松浦、蝦夷新図（「三航蝦夷全図」と称される。蝦夷、樺太、クナシリ、エトロフの大地図）を津藩の藤堂侯、水戸藩の老公（徳川斉昭）、仙台藩の伊達侯、及び幕府の上級役人、川路聖謨、松本十郎兵衛などに献上。松浦は津の藤堂侯からは度重なる援助を受けていた。

8.- 松浦、一枚摺り「蝦夷路程便覧・壺の石」（東西蝦夷地の道路、距離の一覧表）を出版。

8.23 (10.14) 日英和親条約を長崎で調印。

9.18 (11.8) プチャーチンの率いる軍艦ディアナ号、大阪に来航。のち下田に向け回航するが、津波のため破損し、12.2 駿河の海岸付近で沈没。

10.1 (11.20) 吉田松陰は萩で、佐久間象山は松本で、蟄居生活開始。

10.19 - 11.11 (12.8 - 12.30) 松浦、幕府の役人、松本十郎兵衛の従者としてロシアの船を見るため下田に行く。

11. 4 (12.23) 駿河、伊豆、相模に大地震。死者一万人余。11.5 伊勢湾から東九州にかけて地震。

11.27 (1855.1.15) 安政に改元。

12.2 (1855.1.19) 幕府、ロシア使節団に沈没したディアナ号の代艦の造船を許可（プチャーチン、1855.5.8 新しい船で日本を去る）。

12.21 (1855.2.7) 幕府、ロシア使節プチャーチンと日露和親条約を下田で調印。千島列島における国境は択捉島と得撫島の間とする。樺太は雑居の地とする。（安政 3.11.10 に批准書交換）。

12.30 (2.16) 松浦、年誌「甲寅のあらまし」を完成。

安政元年の人口 東蝦夷地 10.787 人、西蝦夷地 4.384 人、北蝦夷地（南樺太）2.639 人、合計 17.810 人(1807 26.256 人)、和人地 63.834 人。

この年

佐久間象山(1811-1864)「省譽録」を執筆(1869刊、序文は勝海舟)。

吉田松陰(1830-1859)「幽囚録」を執筆(1891刊)。

「亜米利加総記」(広瀬竹庵訳)をはじめ、魏源「海国図志」の抄訳が何種類刊行。

福沢諭吉(1835-1901)蘭学を学ぶため長崎に赴く。

<b>安政 2 (1855.2.17 - 1856.2.5) 乙卯 松浦 38 歳</b>
---

1.3 (1855.2.19) アレキサンドル 2 世、ニコライ一世を継いでロシア皇帝に即位。

2.- 松浦、一枚刷り「後方羊蹄於路志」(アイヌ語彙集)の序文を記す。(後書は柴田収蔵。安政 2 年 5 月の日付)。

2.22 幕府、松前藩に東部木古内村以北、西部乙部村以北の地を上地させ、箱館奉行の管轄とする。第二次幕府直轄時代開始。

3.2 (4.18) シヤム(タイ)・英国間にシヤム開国の条約調印。

3.27 (5.13) 幕府は津軽、南部、仙台、秋田の各藩主に蝦夷地の警備を命ずる。松前藩領は福山城とその周辺に限定。

3.28 松前藩の藩士、幕府の命令で、クシュンコタンのロシア陣営を撤去する。

3.- 外国船に薪水、食料などを供給するため箱館港開港。

5.4 向山源太夫、箱館奉行支配組頭に補せられ、松浦に「もはや足下も長の心願成就したりと思ふべし」との言あり。

8.25 (9.25) オランダ国王、幕府に汽船を寄贈。のち観光丸と命名。

9.23 松浦、最初 3 回の蝦夷踏査の日記「三航蝦夷日記」35 巻を箱館奉行に献上。

10.2 (11.11) 江戸および周辺に大地震(安政大地震)、火災で江戸城、諸大名屋敷、民家、寺院の被害甚大。死者 7000 人余。水戸藩の藤田東湖、地震で死亡。

10.14 (11.23) 幕府、500 石以下の土および諸藩士庶に蝦夷地移住を許可。

10.24 (12.3) 幕府、長崎に海軍伝習所を設ける(勝海舟、最初の生徒の一人)。

10.- 松浦、一枚刷り「於幾能以志」(おきのいし、蝦夷地 54 か所の情報)を出版。

12.22 箱館奉行、和人女性蝦夷地同伴の禁を解除。

12.23 (1856.1.30) 日蘭和親条約、長崎で調印。

12.25 (1856.2.1) 松浦、正式に「蝦夷地御用御雇」に仰せ付けられ、箱館行きを命ぜられる。

12.- 松浦、大野藩の内山隆佐などに、蝦夷地開拓構想の書簡を送る。

年末か。松浦、年誌「乙卯のあらまし」を完成。

## この年

間宮林蔵述、村上貞廉編、「北蝦夷図説」刊。

桂川甫周（その他）、「和蘭字彙」(おらんだじい、いわゆるゾーフ・ハルマのオランダ語辞書)刊。安政5年まで刊（約五万の見出し語）。

福沢諭吉、大阪の緒方洪庵の適塾に入門。

この年、伊勢講の「おかげまいり」起こる。

<b>安政3 (1856.2.6 - 1857.1.25) 丙辰 松浦 39歳</b>
---

1.- 松浦、江戸の箱館奉行所の三田喜六より二月初めに蝦夷へ出発するよう  
仰せつけられ、水戸藩主の徳川斉昭、津藩主の藤堂高猷、大野藩主の土井利忠  
より餞別をたまわる。

2.6 松浦、江戸を出発。

2.11 (3.17) 幕府、洋学所（後の蕃書調所）を設立。4.4 箕作阮甫などを教官に任  
命。

2.24 (3.30) クリミア戦争終る（パリ条約調印）。同日、ロシア皇帝アレクサン  
ドル2世、農奴解放を布告。

3.5 (4.9) 松浦、箱館に到着。

3.29 (5.3) 松浦、向山源太夫の従者として蒸気船で当別まで行き、のち西海岸を  
徒歩で北上。

4.22 ■ 松浦、弁慶岬でリクニンリキなどのアイヌに会い、シマコマキ場所のアイ  
ヌ酷使の状況を訴えられる。

5.19 松浦、宗谷に到着。5.23 白主(樺太)到着。タライカ湖まで北上。

5.21 (6.23) 箱館奉行、アイヌに帰俗、和語習得、耕作を奨励し、以後、アイヌ  
を役土人、平土人と呼ぶこととする。

7.21 (8.21) 初代米駐日総領事ハリス、下田に来航。

7.28 幕府、村垣範正を箱館奉行に任命、以後奉行は三人になる（一人は江戸に、  
一人は箱館に勤務、一人は蝦夷地巡回とする）。

- 8.7 向山源太夫一行、白土から宗谷に渡る。 8.10 向山源太夫、宗谷にて客死。  
10.16 松浦、単独で北東海岸に沿って網走まで行き、さらに根室、厚岸、室蘭を  
通って箱館に帰る。
- 8.22 吉田松陰、禁固中、萩で講義を始める（松下村塾の起源）。
- 9.10 (10.8) アヘン密輸を阻止するため清の官憲がアロー号の乗員を抑留。英国、  
釈放を要求（アロー号事件）。第二次アヘン戦争に発展。
- 10.13 松浦、箱館に帰着。
- 11.16 松浦、箱館にて病臥。
- 11.- 「蝦夷行程記」（阿倍将翁（喜任）著。松浦校閲）刊行。
- 12.1 松浦、病床で辞世の句を認める「我死なば焼くな埋めな新小田に捨ててぞ  
秋の熟りをば見よ」。月末にわずか回復する。

この年、松浦、「箱館往来」刊行か。

## この年

藤田東湖の「回天詩史」没後刊行。  
吉田松陰、「講孟割記」、「丙辰幽室文稿」を執筆。  
月性(1817-1858)、「仏法護国論」この年刊行か。  
頼三樹郎、「海国図志 印度国部」（魏原著）訓読本を刊行。  
仮名垣魯文、「安政見聞集」刊。  
幕府、1792年以來発禁の「海国兵談」（林子平）の再刊を許可。  
安藤広重、名所江戸百景のシリーズの出版開始。  
下岡蓮杖、日本人として初めて長崎で写真術を学ぶ。

<p><b>安政 4 (1857.1.26 -1858.2.13) 丁巳 この年は閏 5 月があった。</b> <b>松浦 40 歳</b></p>
--

- 1.18 (1857.2.12) 蕃書調所開校。はじめは幕臣の子弟のみに入学を許可。
- 2.8 松浦、箱館奉行所に樺太の踏査日誌、『北蝦夷日記』9冊を納本
- 2.18 松浦、銀三枚の手当をたまわる。
- 2.9 (1857.3.4) 英・ペルシア間にパリ条約調印。ペルシアがアフガニスタンの独  
立を承認。
- 3.- ヤムクシナイ（山越内）に疱瘡流行。
- 4.5 (4.28) 米国貿易事務官ライス、箱館に着。堀、村垣両奉行に対面。

- 4.17 (1857.5.10) インドでセポイの反乱起こる。(1857.9.20 ムガール帝国崩壊)
- 4.21 松浦、前年の踏査日記「竹四郎廻浦日記」の序文を記す。
- 4.23 松浦、全蝦夷地の調査及び開発の見込みを調査するよう箱館奉行村垣より命ぜられる。
- 4.29 松浦、箱館を出発し、五回目の蝦夷地踏査の旅にのぼる。
- 4.-松浦、アイヌの風俗、伝説を記した「蝦夷葉那誌」(えぞばなし、小川一水編、橋本玉蘭画) 刊行。
- 5.17 松浦、石狩川の河口に到着し、川を遡る。5.26 チクベツブトの大番屋(現・旭川市の市街地区) に至る。
- 5.26 (1857.6.17) 下田で日米修好通商条約を締結。(1854年の日米和親条約を拡充)
- \*5.6 (6.27) 桑田立斎(東蝦夷地) と深瀬洋春(西蝦夷地) の両医師は蝦夷地で悉皆的な種痘の接種を開始。
- \*5.11 (7.2) 堀利熙、蝦夷地巡回に出発。9.27 箱館に帰着。従者の玉虫左太夫、のち「入北記」を記す。
- \*5.22 松浦、石狩川の河口(運上屋) に戻る。
- 6.2 (7.22) 松浦、北方に向け船で出発し、西海岸に沿って天塩まで行き 6.8 天塩川を遡り、6.19 ナヨロに至り、7.5 石狩に戻る。
- 7.6 松浦、東南方面に出発。ツイシカリ、チトセ、支笏湖、モロラン、ウスを通り、山を越えて西海岸に至り、8.9 シリベツ、スツツ、さらに山を越えて東海岸に至り、8.13 クンヌイ、そこから山を越えて西海岸に至る道を踏査。8.19 再び東海岸のクンヌイに戻り、東海岸に沿って南の方に行く。
- 8.27 松浦、蝦夷地の5回目の旅から箱館に帰着。(その後で■『人物誌』第一編を書き始めたか)。
- 10.15 (12.1) ■ 松浦、「丁巳日誌」の凡例を執筆。自筆本(秋葉実解説)の上77、352、355、402、下148の各頁に『人物誌』に言及。
- 10.21 (12.7) アメリカ領事ハリス、江戸城にて将軍にアメリカ大統領の親書を提出。



11.13 (1857.12.28) 英仏連合軍、広州を攻撃（アロー号事件。第2次アヘン戦争勃発）。

11.27 松浦、一枚刷り「末和留辺志」（まわるべし、アイヌ語彙）を発表（箱館奉行所へ提出の日付け）。

12.3 (1859.1.7) 松浦、「末和留辺志」提出に対して箱館奉行所から銀3枚をたまわる。

12.22 松浦、箱館奉行村垣から「廻浦日記」（安政3年）納本の褒美として銀7枚をたまわる。

12.30 (1858.2.13) ■ 松浦、『人物誌』第一編の凡例を執筆（日付）。

12.- 松浦、鈴木茶溪の『唐太日記』に序を執筆（安政7.1刊行）。

## この年

ヨシフ・ゴシケーヴィチ、橘耕斎を助手として「和魯通言比考」をペテルブルグで刊行（1万6千語を収録）。

横山由清訳、川上冬崖画「魯敏遜漂行紀略」刊（デフォー作「ロビンソン・クルーソー」のオランダ語略本からの重訳）。

小関三英「那波列翁伝」活字版、刊（オランダ人ヨハンネス・ファン・デル・リンデンのナポレオン伝の翻訳）。

平田篤胤「大道或問」刊。

会沢正志斎「新論」（1825執筆）刊。

大橋訥庵「關邪小言」刊。

<b>安政 5 (1858.2.14 --1859.2.2) 戊午 松浦 41 歳</b>
---

1.1 (1858.2.14) ■ 向山黄邨、「人物誌」初編の叙を執筆。

1.2 ■ 松浦、『人物誌』初編の草稿を箱館奉行所に納入し、評価されて同月12日に銀3枚をたまわる。

1.24 松浦、6回目の蝦夷地踏査に出発。2.19 石狩運上屋の所在地に至り、2.23 出発してチクベツブト（現・旭川市）を経て、さらに山を越えて十勝川を下り、東海岸に至る。4.25 根室の会所に到着。

4.16 (5.28) ロシアと清国、愛琿条約を調印。アムール川（黒竜江）をもって両国の国境と定める。これによって沿海州とともにサハリンもロシア領となる。

4.23 (6.4) 彦根城主井伊直弼、大老に就任。 .

4.29 松浦、ネモロを出発。シレットコ、ソウヤを通過して東北海岸を踏査し、その後、西海岸に沿って6.13 石狩の運上屋に帰着。

- 4.- 箱館奉行竹内、堀部、村垣、石狩場所の改革を提言。場所の運上屋の請負人、阿部屋を解任し、以後、幕府（箱館奉行）が直接石狩場所の経営にあたる。
- 5.3 (6.13) 清国とロシア、天津条約を調印。以後、米(6.18)、英(6.26)、仏(6.27)、とも類似の条約を調印。
- 6.17 松浦、東南方面踏査に出発。ユウフツ、日高を通過、襟裳岬(7.10)まで。さらにヒロオを通り、ヘルフネ川（歴舟川）をさかのぼり、そこから十勝川へ、オペレペレケプ（帯広）を通過してまた海岸へ(7.21 オホツナイ)。そこから日高地方を通過して箱館方面へ帰還。
- 6.19 (7.29) 日米修好通商条約調印。
- 6.23 (8.2) 英国、全インド統治権を握る。
- 7.4 (8.13) 第十三代将軍徳川家定（1824 生まれ）没。
- 7.8 幕府、はじめて外国奉行を置く（堀利熙ら 5 人）。
- 7.10 (8.18) 日蘭修好通商航海条約・貿易章程調印。
- 7.11 日露修好通商条約・貿易章程調印。
- 7.18 日英修好通商条約・貿易章程調印。
- 8.21 松浦、205 日ぶりに箱館に帰着。「戊午日誌」の整理を始める。
- 8.23 (9.29) 幕府、コレラの全国的な流行に対して、大規模な救済活動をはじめ
- る。
- 8.27 松浦、江戸へ出府願書を差し出し、8.28 許可される。
- 9.1.箱館奉行村垣範正、「此国の仙人とこそいはまほし ぬその野山を分尽すとは」との松浦を褒める和歌を詠む。
- 9.2 漢詩人梁川星巖、尊王攘夷の志士に連座して逮捕される直前にコレラで死亡。
- 9.3 (1858.10.9) 日仏修好通商条約・貿易章程を調印。これで 5 番目の安政条約が調印され、幕府は箱館、兵庫（神戸）、神奈川（横浜）、長崎、新潟の各港の開港を約束。
- 9.7 (10.13) 江戸にて攘夷派の逮捕始まる（安政の大獄）。まず、梅田雲浜、その後、10.23 橋本左内、12.5 吉田松陰、頼三樹三郎その他逮捕される。

- 9.8 松浦、「東西蝦夷山川地理取調図」の校本に対して幕府より銀5枚をたまる（万延元年印刷）。
- 9.10 松浦、アイヌの少年、市助を江戸に連れ行くべく、許可を申請する。
- 9.30 (1858.11.5) ロシア領事ヨシフ・ゴシケーヴィチ、箱館着。
- 9.-?(秋) 松浦、「蝦夷漫画」の序を執筆（安政6年刊）。
- 9.-. 松浦、一枚刷り「北蝦夷路程便覧・壺の石後」（樺太の地名、および距離の一覧表）の序を執筆。
- 9.-. ■ 玉匣外史（本名不詳）、「人物誌第二編」の漢文序を執筆。
- 10.5 松浦、市助を連れて江戸へ出発。
- 10.25 (11.30) 徳川家茂、第14代将軍に任ぜられる。
- 11.9 松浦と市助、仙台着。松浦、井伊直弼の「暴政」を聞いて驚く（安政の大獄）。
- 11.22 松浦と市助、江戸に到着。以後、松浦、松前藩の追求を恐れて、住居を転々とする。
- 12.8 (1859.1.11) ■ 松浦、「人物誌」の出版許可願いを外国奉行永井尚志に提出。箱館奉行の異見で不許可となる。
- 12.1 松浦、折本「蝦夷地名奈留辺志」（えぞちめいなるべし）の出版許可願いを提出。12.26 許可。
- 12.30 (1859. 2.2) ■ 松浦、「人物誌」第二編の「凡例」を執筆。

## この年

コレラ、長崎に発生、その後大阪、京都、江戸等に蔓延。  
江戸の神田に、民間の資金で、本邦最初の種痘所（お玉が池種痘所）開業。  
英人画家ワーグマン（絵入り倫敦新聞の特派員）来日。日本の風俗を描く。  
安藤広重(1797-1858) 没。  
福沢諭吉、築地の中津藩屋敷内に蘭学の私塾を開く（慶応義塾の初まり）。

<b>安政 6 (1859.2.3 - 1860.1.22) 己未 松浦 42 歳</b>
---

- 1.16 (1859.2.18) 仏軍、サイゴンを占領。
- 2.15 松浦、横浜に後方羊蹄山（しりべしやま）の神を祀る神社建設を建議。

- 2.22 (3.26) 江戸（青山、世田谷、四谷、市谷、小石川）に大火災。諸藩邸多数類焼。
- 3.- 松浦、『後方羊蹄日誌』の凡例執筆（文久元年刊行か）。大沼枕山跋、向山黄村、三田葆光、松平忠敏等の漢詩、和歌、また春木南華、探斎武一、狩野永秀などの挿絵多数。
- 4.10 (5.12) 松浦、牛込から本所富川町に転居。
- 5.11 (6.11) 松浦、「東西蝦夷山川地理調図」（縮尺 1:200.000、26 枚から成る）の印刷許可を申請。
- 5.17 (6.17) 漂流民の浜田彦蔵、米国領事館の通訳、ジョゼフ・ヒコとして帰国。
- 5.26 (1859.6.26) 英国駐日総領事ラザフォード・オールコック江戸に到着。のち、報告書「The Capital of the Tycoon」(1863)を著す。
- 6.2 (7.1) 箱館港、修好通商条約を結んだ諸外国に貿易港として開港。
- 7.6 (8.4) フィリップ・フランツフォン・シーボルト、二度目の来日(1861 幕府の顧問)。1862.5 オランダに帰国。
- 7.10 松浦、安政 5 年の旅日誌「戊午日誌」執筆終了。引き続き■『人物誌』第二編に取り掛かる。
- 7.20 (8.18) 露使節ムラビョフ、軍艦 6 隻を率いて品川に来航。7.27 横浜にて二人の乗組員攘夷派によって殺害される。
- 7.- 松浦、この時期江戸の深川に住む。
- 8.27 (9.23) 幕府、水戸藩主徳川斉昭に国許永蟄居を命ずる。 .
- 9.12 松浦、「蝦夷地名奈留辺志」幕府に 100 部提出。銀三枚たまわる。
- 9.14 梅田雲浜、獄中にて死亡。
- 9.18 松浦、福田とうと結婚。 .
- 9.27 (10.22) 幕府は秋田、仙台、津軽、南部の諸藩（安政 2 年 3.27 参照）に引き続き、会津、庄内二藩に蝦夷地の警備・開拓にあたらせる。
- 9.30 ■ 松浦、『人物誌』の第二編を箱館奉行に提出(添え状の文書による)。
- 10.7 頼三樹三郎、橋本左内、刑死。
- 10.27 吉田松陰、刑死。

12.12 (1860.1.4) 松浦、健康上の理由からお役御免を願い出、19に聞き届けられる。

12.28 松浦、二首の漢詩を記す。第一首は「世人勿笑屋雖小 腹貯蝦夷山与川  
俸禄今朝歳共棄 誇言巾上有晴天」。

12.- 松浦、「戊午日誌」の凡例に日付を書く。

12.- 松浦、26枚からなる地図「東西蝦夷山川地理取調図」（蝦夷、千島の二島記載。約9,800のアイヌ語地名記載）の凡例を書く。

## この年

佐藤一斎（1772生）没。

塩谷宕陰（1809-1867）「隔鞞論」刊。

大沼枕山（1818-1891）「枕山詩鈔」（全3編）。

成島柳北「柳橋新誌」初編刊。

福沢諭吉、蘭学を止め、英学を始める。

<b>安政 7 / 万延 1 (1860.1.23 - 1861.1.11) 庚申 この年は閏3月があった。 松浦 43歳</b>
---

1.13 (1860.2.4) 幕府の軍艦「咸臨丸」、初めて日本人操艦により品川から米国に向け出帆。船長は勝海舟、船客の中に福沢諭吉（軍艦奉行木村喜毅の従僕として）がいた。2.26 サンフランシスコ着、5.6 品川に帰還。

1.18 (1860.2.9) 日本初の訪米使節団、米軍艦にて米国に向け出帆。（団長新見正興、副団長村垣範正）。2.13 (3.4) ホノルル着、3.8 (3.28) サンフランシスコ着。

1.19 ■ 松浦、「人物誌」後編（第二編のことか）提出に対して箱館奉行より銀二枚をたまわる。

1.- 松浦、「東西蝦夷場所境調書」を著す。

2.1 松浦、箱館奉行に『唐太日記』（鈴木茶溪著、松浦武四郎評注）を提出。

2.5 (2.26) 横浜でオランダ商船長ら二人殺害される。

2.- 松浦、「燼心餘赤」（じんしんよせき、安政 2.10.15 から同 7.2.11 までの事務上の文書・書簡などを集めたもの）この頃編集か。

3.3 (1860.3.24) 大老井伊直弼、尊王攘夷派の水戸藩浪人に暗殺される（桜田門外の変）。

\*3.18 (1860.4.8) 新年号「万延」に改元。

\*3.28 (5.18) 幕府の訪米使節団、ワシントンにて、大統領ブキャナンと会見。批准書交換。

4.1 (1860.5.21) ■松浦、深川から下谷（現・台東区）に転居。『人物誌』第三篇の執筆の下限。

4.27 (6.16) .訪米使節団、ニューヨーク着。市街を行進して市民に歓迎される。その風景を詩人ウォルト・ホイットマンが詩集「草の葉」の「ブロードウェイ・ページェント」で描いている。

5.11 幕府、宮廷に皇女和宮と将軍家茂との結婚の斡旋を懇請。

5.15 松浦、『北蝦夷餘志』の執筆を終了（この日「筆工頼む」）刊行は年内か。跋は鷲津毅堂、和歌は斎藤昌磨、井上文雄、漢詩は市川十郎、鈴木鷲湖、小川速堂など、挿絵は、田崎草雲、田崎澄江、菊池容斎、岡本秋暉など。

6.17 (1860.8.3) 日葡修好通商条約。貿易章程を江戸にて調印。

6- 松浦、地図一枚『蝦夷闔境山川地理取調大概図』（えぞこうきょうさんせんちりとりしらべたいがいず、蝦夷、樺太、千島列島記載）。このころ刊行か。

7.2 (1860.8.18) 太平軍、上海に侵攻、英仏連合軍に敗北。

7.15 松浦の妻とう、出産（赤子死亡）。

7.19 (1860.9.4) プロシア使節オイレンブルク、品川に来航。

8.9 (9.23) 幕府、幕臣の子弟に西洋語学習を勧め、蕃書調所入学を奨励。

8.15 徳川斉昭没（水戸前藩主）

8.18 (1860.10.2) 孝明天皇、幕府の条約破棄と攘夷実行を条件に、将軍家茂への妹和宮の降嫁勅許を内達。10.18 正式勅許。

8.23 蕃書調所、英語教育開始。

9.11 (1860.10.24) 英・清、北京条約調印（天津条約を清国に不利に拡大）。

9.11 英国公使オールコック、外国人として初めて富士登山。

9.24 (1860.11.6) 米大統領に共和党のリンカン当選（1861.3.4 就任）。

9.28 幕府の訪米使節団、合衆国より江戸に帰還。

10- 松浦、「北蝦夷山川取調図」完成。写本のみ、（凡例の日付け）。

11.6 (1860.12.17) 箱館奉行兼外国奉行堀利熙、プロシアとの条約紛議のため切腹自殺。

11.27 (1861.1.7) プロイセン王ウィルヘルム一世（後のドイツ皇帝）即位。

12.1 (1861.1.11) 天皇、幕府とプロシアとの条約締結奏上に対して怒り、皇女和宮降嫁破約の意思を示す（所司代の懇請により撤回）

12.5 (1861.1.15) 米公使館通弁官ヒュースケン、殺害される。

12.14 (1861.1.24) プロシア使節オイレンブルクと日普修好通商条約・貿易章程を調印。

## この年

横井小楠、「国是三論」を著す。

橘曙覧、飛騨の鉾山を訪ね、鉾山で働く人を詠む一連の和歌を制作。

女性漢詩人江馬細香、最後となる漢詩を制作。翌年没。

歌川貞秀、「横浜絵」の制作開始。

河鍋暁斎、「狂斎画譜」を刊行。